

ついのすみかに満ちる希望

「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所が密集する東京・山谷。高度経済成長の時代、ここは活気あふれる日雇い労働者の町だった。だが今、出会う人々の姿には老いが目立ち、病に侵されている人もいる。さらに、長引く不況で仕事を得られず、路上生活を余儀なくされる人も。そんな、過酷な彼らの人生を、そっと支える場所がある。

人生の最終章に寄り添う

山谷のほぼ真ん中、町に溶け込むようにその「家」はある。玄関に立つと、思いがけず頭上から笑い声が響いてきた。声に誘われるように階段を登っていくと、4階の談話室に大勢が集まり、和やかな団らんが繰り返られていた。

「きぼうのいえ」は、NPO法人きぼうのいえが運営する在宅型ホスピスである。身寄りがなく、深刻な病気を持っていたり、余命が限られた人々などを受け入れている。入居者の多くは山谷のドヤ（簡易宿泊所）で暮らしていた人たちで、食事や入浴、服薬などの支援をスタッフや訪問介護ヘルパーから受けながら生活している。医療が必

要であれば通院したり、ここで訪問看護を受ける。死が近づけば、医師の往診を受けながらの看取りが行われる。

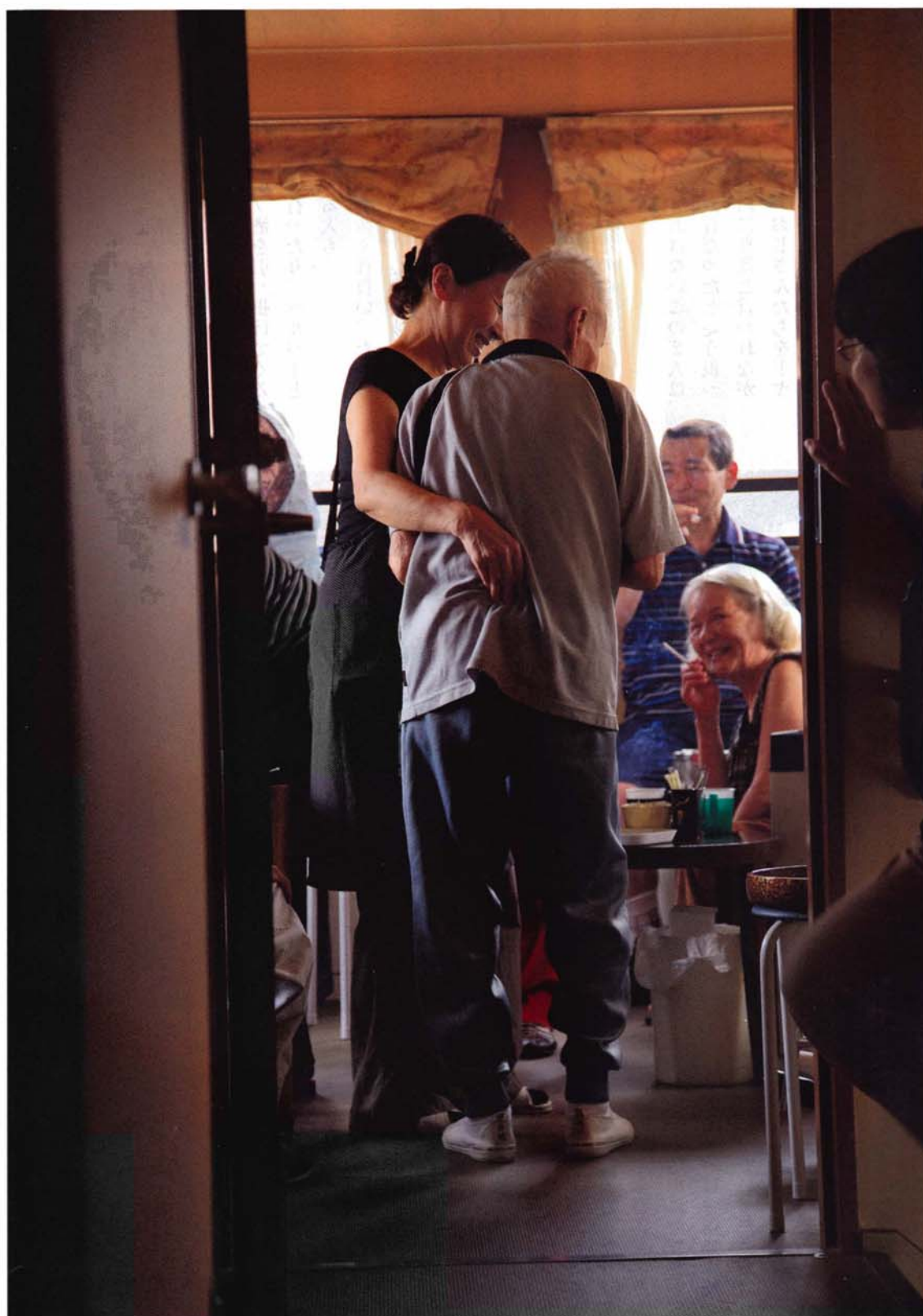
この日は、毎週木曜日に開かれる「ティーサービス」の日。ソファに深く腰掛けて淹れたてのコーヒを味わう入居者たちに「カステラもいかがですか」と、スタッフやボランティアがサービスして回る。

「ちよつと声をかけてくるわ」

居室にこもりがちな入居者を誘うためにスタッフが階段を下りて行く。ほどなく尿道カテーテルをつけた高齢男性がリビングに入ってきた。入居してまだ3週間という男性は長年ドヤで暮らしてきたが、がんを患って入院。区のソーシャルワーカーの紹介でここにやって来た。笑顔にまだ緊張感が残るが、それをほぐすように「ここにど



山本雅基さんと美恵さん。美恵さんは看護師として先端医療の現場にいた。運命的な出会いの後に結婚した2人は、呼び寄せられるように山谷に居を定め、ホスピスを開いた



ティータイムは禁煙タイムと喫煙自由の2部制だ。タバコ好きの入居者がゆっくりとやって来た。さっと介助の手を差し出して支えるボランティア。「待っていたわよ」とタバコ仲間から声がかかる

うぞ」とスタッフが温かく声をかける。
部屋には笑いが絶えず、入居者の表情は
明るい。しかし、見かけでは分からないが、
それぞれが難病や末期がんなどを抱えてい

る。周囲と大笑いしていた男性がこう言う。
「オレ、がんが3ヵ所に転移したって医者
に言われて、体もひどく痩せてしまったん
だ。だけどここに入ったら元気になって4

キロも太ったのさ」
病の重さは服用する薬の量からも分かる。
誰もが数種類、多い人は15、16種類ほどを
飲んでいる。入居者たちは明らかに人生の

最終章にいるのだ。

「ここに入った翌日に亡くなる人もいるし、数年間暮らす人もいます」とスタッフの島田純江さんは教えてくれた。ここでの生活は自由だ。喫煙や飲酒、外出などに制限はなく、長年路上で生活していたある入居者は、時々仲間がたむろする「いろは商店街」に行き、カップ酒を引っ掛けてくる。近くのパチンコ屋に行ったり、ヘルパーとの散歩を楽しみにする人も。

それぞれに人生の重荷を背負い、だからこそ今を楽しみたいと願う心情が彼らの笑顔からうかがえる。

人々は「無謀のいえ」と言った

「山谷にこそホスピスが必要だ」。こう考へてきぼうのいえを建てたのは、山本雅基さんと妻の美恵さん。

困窮する人を放っておけないこの2人は、新婚旅行の行き先は山谷だったという根っからの篤志家だ。周囲に無謀と言われながらも、「なんとしても、おじさんたちをドヤの一室で孤独に死なせてはならない」と教会に寄付を募ったり、銀行と交渉して金策に走り回った。

「無料低額宿泊所」として2002年にオープンしたきぼうのいえは、鉄筋4階建てで居室は21室。隣で運営する「なかよしハウス」と合わせ、受け入れは32室となる。すべて個室で、各居室には洗面台、エアコンはもとより介護用ベッド、冷蔵庫、クロ



「どうぞ、どうぞ」とティータイムに誘うスタッフとボランティア

ドヤで暮らしてきた人の多くは独身者で、親族との縁も切れている人がほとんど。病に倒れば、余命の告知から入院や手術の手続き、さらには退院後の行き場所の決定まですべてを自分で負わなければならない。自己責任と片付けるには重すぎるその人生の最後を、当初は「無謀のいえ」と揶揄されたところが、受け止めようとしたのだ。

ただ、山谷の新参者として、開設当初は波風も立った。ドヤの住人から「オレをすぐに入れる」「金を貸せ」などと迫られたり、ドヤ経営者から「客を取るな」と怒鳴り込まれたこともある。しかし、空気は確実に変わっていった。ある男性入居者が美恵さんにこう話したという。

「自分は50年間、山谷で生きてきた。三疊のドヤに住み、路上賭博をやりながら、きぼうのいえができるのを眺めていたけれど、くそ面白くなかった。完成してもどうせおれなんかには縁がないだろうと思っていた。でも、仲間のひとりがここに入って、車いすで買い物に行ったり玄関先でスタッフと楽しそうに話す姿を見て、考えが変わって

1ゼット、テレビなども整っている。「個室や設備が立派すぎるといふ人もいました。天涯孤独な人たちが紙袋ひとつでここにやってきても、その日から自分らしく暮らせるようにしたかった。僕は死んでいく場を提供したかったのではなく、生きていくことは捨てたもんじゃあないと思っただけです」と雅基さん。



- ①リビングまで来られない人のために、コーヒーとカステラを居室まで出前するスタッフ
- ②お茶のお誘いに居室をノックしたスタッフ。「昨夜はずっとサッカーを見ていた」「眠いでしょ」と話はずむ
- ③納骨を待つ遺骨。身寄りのない遺骨は、長野県伊那市にあるきぼうのいえの共同墓地に埋葬する
- ④山谷の中心にある「いろは商店街」。8～9割の店舗のシャッターが閉まったままだが、夜にはこのアーケードに大勢の路上生活者が集まり、段ボールを並べ寝床をつくる
- ⑤玄関にあった七夕の飾り。知的な障がいなどで文字が書けない入居者の願いは、スタッフが聞き取って代筆する

きた。そして、最後に玄関から賛美歌に包まれるように霊柩車が出て行ったのを見た時、心底、羨ましいと思ったんだ」
それまで自分は行き倒れて死ぬのだろう

とあきらめていたこの男性は「いよいよよくなったらここに入れるんだ」と生きることに希望が持てるようになったという。
「山谷に希望をもたらしたいと思っては

いましたが、それをおじさんたちが自分で感じ取ってくれたことがうれしい」(美恵さん)

生と死を見つめる

きぼうのいえの屋上にある小さな礼拝堂。祭壇の周辺にはたくさんの写真立てが並ぶ。穏やかでいい表情をしたこれらの写真は、ここで最期を看取った人たちの遺影である。

開設以来、115人を見送ったという雅基さんは「僕はここにきたおじさんたちから、まず身体的な痛みをとるようにしています。次は心の苦しさをからの解放です」と話し、傍らの美恵さんが続ける。

「いろんなおじさんがいるのよ。病気が治らないのは『この食事がまづいからだ』と厨房のせ



きぼうのいえの玄関。玄関前にはいすが置かれ、一服しながら山谷を行き来する人々を眺めている入居者の姿も

いにしたり、スタッフに暴言を浴びせる人も珍しくないの。腹も立つけど、時々ポロツと『ここはいいところだ』『世話になるよな』なんて本音を言うから、憎めません」
わがままが出るのは、その人にとってきぼうのいえが居心地のいい場所で、受け止めてくれる人がいると認識された証しでもある。自分に味方がいないことを骨身にしみながら生きてきた彼らは、スタッフを試しながら自分の心と向き合おうとする。そして心に折り合いがつくと、今度はもっと生きていくことを楽しもうと変わるのだ。
生と死を見つめているのは入居者だけではない。それを丸ごと受け入れ、最終章に立ち会うことを選んだスタッフと数多くのボランティアの存在が、入居者に残りの人生を全うする勇気を与えている。
「人は次に生まれ変わる人生のためにも、最後は幸せな死を迎えてほしい」
もともとはキリスト教の神父を目指していた雅基さんの言葉である。きぼうのいえに満ちる笑顔は、失望する人生などないことを伝えている。